

農業ガイド1011号

2015年6月6日

青果物堅調376億円 2014年度のホクレン帯広

主な品目	数量 (トン)	前年度 比(%)	金額 (万円)	前年度 比(%)
食用ジャガイモ	32万4720	99	171億2100	92
ナガイモ	2万9280	89	91億9700	95
ダイコン	4万0290	112	40億1500	103
ニンジン	2万6270	129	25億0200	102
タマネギ	1万1770	122	9億1100	93
キャベツ	6110	114	4億7700	112
ゴボウ	2560	104	3億9300	111
ハクサイ	3460	103	2億6200	102
カボチャ	2960	112	3億3300	140
トウモロコシ	1560	109	2億4400	113
ユリ根	220	99	1億9500	99
アスパラガス	110	105	9700	101
その他	6300	110	18億7300	107
合 計	45万5600	102	376億2000	96

ホクレン帯広支所が扱った2014年度の青果物販売実績は、数量が前年度比2%増の45万5600トン、販売金額は同4%減の376億2000万円だった。過去最高水準だった前年より金額は下がったものの、おおむね堅調な取引だった。

ホクレン帯広支所が扱う青果物は、十勝だけでなくダイコンなど一部釧路地区も含んでいる。

十勝が大きなシェアを占める食用ジャガイモ（生食用、加工用）は、数量が同1%減の32万4720トン、金額が同8%減の171億2100万円だった。他産地も含め出回る量が多かったため、特にスーパーなどに並ぶ生食用の販売が14年産を通じて厳しかった。13年度に比べると、量、金額とも減少したが、12年度比では上回っている。

ナガイモは4～10月が13年産、11～翌年3月が14年産。13年産は大豊作だった12年産に比べて収量が少な

った。14年産は豊作で輸出で好まれる大型サイズも多く、堅調に推移している。14年度全体では数量が同11%減の2万9280トン、金額は同5%減の91億9700万円だった。

ダイコンは6月末の収穫開始直後は振るわず、6月の長雨の影響で種まきが滞って8月の出荷も少なかった。ただ、8、9月の府県の長雨や日照不足の影響などにより一般野菜が全般に高値となった影響で市況が回復し、数量、金額とも前年を上回った。

キャベツも波が大きかったものの、8、9月の府県の減産時は価格が高かった。カボチャは主産地の上川が不作だったため品薄感が広がり、金額が40%伸びるなど好調だった。

ニンジン は前年を大幅に上回る豊作だったものの、全道的にも豊作傾向で出回量が多かったため、市況が厳しく、金額では微増だった。

タマネギは他産地の干ばつなどで市況が高かった前年の反動で金額は下がったが、おおむね順調な推移だった。

同支所は「多くを占めるジャガイモの販売環境が14年産を通じて厳しかった。一般野菜は市況の浮き沈みが大きかったが、ニンジンなど一部を除き全体としてみると堅調だった」とみている。

かちまいサンデー とかち特報部 農業拓くロボット 十勝で実証実験盛ん 2015年6月21日

十勝管内で今年度、農業へのロボット技術導入の試験が盛んに行われている。農林水産省が支援しており、同省の「ロボット技術導入実証事業」で採択された全国36団体のうち、十勝管内は9つに上り、予算計18億円の2割に当たる3億4000万円を占めている。期待されている技術は、トラクターの無人化や自動操縦などで、十勝の生産者やJAなどが産学官連携で先端技術の開発、活用に取り組んでいる。

無人GPSトラクター 耕起や播種に



音更町の農場で実証試験が行われているロボットトラクターとの協調作業（写真は北大との実験時、ヤママーアグリジャパン提供）

運転者が手を離れたハンドルが、自動的に小刻みに動く。畑の凸凹にも構わず、トラクターは直進し、まっすぐな畝が作られた。今年の小豆の種まき作業で見た、GPS（全地球測位システム）

による、自動操舵（そうだ）トラクターの様子だ。

十勝農業で導入が進む代表的なロボット技術は、トラクターの「自動化」だ。昨年7月に帯広市で開かれ、約20万人が訪れた国際農業機械展の開会式でも、無人のロボットトラクターのデモ走行に注目が集まった。

無人とまではいかないが、管内では近年、GPSを使って、トラクターの走路をガイドしたり、自動で操縦したりする技術を取り入れる農家が増えている。

2台が同時に 人手不足解消

ロボット技術の導入は、作業の正確さが向上し、農家が大規模化する中、人手不足や作業時間の課題解決につながると期待されている。将来的には世界への技術輸出